第4章

第Ⅲ期（1790年～1800年）貴族文化人の出版活動に対する監視強化

4.1. 出版統制関連法令（1790年～1793年）

この第Ⅲ期前期にあたる1790年から1793年にかけては貴族文化人、特にラジーシチェフとノヴィコフの出版活動に対する監視強化は、内容規制法令が具体的に2人を対象にして発布されていることに反映されている。そして、エカテリーナⅡ世と貴族文化人との関係は、対立関係から厳しい管理へと変化する。

1790年5月15日付けモスクワ警視総監 A.A.プロゾロフスキー[1]宛て勅令：ロシア帝国法律大全№16868[2]	**書籍の検閲はポリスの管轄下にはいることについて** この勅令には「書籍の検閲はポリスがおこない、ポリスが検閲人を任命する。ポリスが全ての責任を負うこと」と明文化されている。	**内容規制(検閲)**

1790年に公式の法令のタイトルに初めて言葉«цензура»が使用されている点は、注目に値する。この時期から«цензура»が現在使用されている「検閲」の意味をもち始めたと考えることができる。また、1789年のフランス革命の影響を恐れたエカテリーナⅡ世がロシアに本格的な出版統制制度の導入を考え始めたとみなすことができる。この勅令によって、1783年に続いてポリスが検閲機能を全面的に負うことが再度明確化されている。この勅令は、エカテリーナⅡ世がまだポリスに検閲責任者として期待をかけていたことを示している。

1790年9月4日付け元老院宛て勅令：ロシア帝国法律大全№16901[3]	**帝位と皇帝権力に対する有害な考えと侮辱的表現がある書籍を出版したかどで6等官ラジーシチェフを処罰することについて（ラジーシチェフ関連）** 「6等官のラジーシチェフが、臣民の忠誠の誓いと役職に反して、社会の安寧を攪乱し、権力への尊敬の念を減殺し、民衆に上司に対する怒りを呼び起こす有害な考えと聖職並びに皇帝権力に対する侮辱的な表現がある『ペテルブルグからモスクワへの旅』というタイトルの書籍を発行することによって罪を犯した。しかもその上、自白したように、彼は検閲の後に自分の印刷所にて印刷した多くの頁を書籍に付け加えるというごまかしをおこなった。サンクト・ペテルブルグ県刑事院により、その後元老院により国家の法令に基づいて彼の行為に対して死刑の判決が下された。・・・スウェーデンとの和平が達成されたことにつき、生命の剥奪から免れしめ、代わりに官位、聖ヴラジーミル勲章、貴族の称号を剥奪し、	**内容規制(検閲)**

	シベリアのイリムスクへの10年間の流刑に処す」と勅令には記述されている。	

この勅令が発布される前の7月に、エカテリーナⅡ世はペテルブルグ警視総監ブリュス伯爵に対して、「社会の安寧を攪乱し、権力への尊敬の念を減殺し、民衆に上司に対する怒りを呼び起こす有害な考えに満ち、聖職並びに皇帝権力に対する屈辱的な表現がある『ペテルブルグからモスクワへの旅』という書籍がここで最近発行された。この書籍の著者は6等官のラジーシチェフであり、彼はポリスの検閲の後に書籍に多くの頁を付け加えたことを認めている。よって、サンクト・ペテルブルグ刑事院で彼の犯罪を審議し、出された判決については元老院に知らせるように」と命令している。

そして、7月13日に、エカテリーナⅡ世はブリュス伯爵に「評判となっている、有害な書籍『ペテルブルグからモスクワへの旅』は、安寧な国家においては許すことはできない。よって書籍が販売されないように、印刷されないように監視することを命令せよ」との指示を出している。7月24日には刑事院のラジーシチェフに対する判決が出され、判決は元老院に送付され、元老院で7月31日に審議がおこなわれ、8月8日に上記の勅令に関する内容の報告書が、元老院からエカテリーナⅡ世に提出されている[4]。この元老院の報告書に基づいて、9月4日付の勅令が発布されている。

1792年4月13日付け A.A.プロゾロフスキー公爵宛て勅令[5]	**ノヴィコフを逮捕し、禁止行為をおこなった理由に関する尋問の実施について（ノヴィコフ関連）** 「アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ公！ 最近、分離派教徒の物語を集め、しかも論評を含んだ書物が教会用活字で印刷され、販売され始めた。・・・多くの箇所で歪曲があり、尊きわが国の教会に背いており、国家統治に対する誹謗に満ち溢れている。この書物は表紙がない状態で販売されているので、どこで印刷されたものかわからない。かかる書籍は、モスクワの民営出版所で印刷されている確率が高い。・・・この件において、我々が良く知っているニコライ・ノヴィコフを疑う理由もある。聞く所によると、彼はモスクワにある印刷所の他にモスクワ郊外の所有地の村にも印刷所を設けたとのことである」と続き、さらに「刑事院と裁判所などから人員を選抜し、該当する書籍と教会用活字を捜索することを命じる。発見した場合には、かかる書籍と教会用文字を没収せよ。さらに、宗教書籍の印刷は唯一宗教印刷所のみ認めるとの法律に従って罪を問い、処罰せよ。ノヴィコフを逮捕し、禁止行為をおこなった理由を尋問せよ」と命じている。こうして、ノヴィコフは1792年4月24日に逮捕され、尋問を受ける。	**内容規制(検閲)**

1792年4月24日付け A.A.プロゾロフスキー公爵からエカテリーナⅡ世宛ての報告[6]	報告書には、「皇帝陛下の4月13日付け勅令を18日に受領しましたが、皇帝陛下の21日の誕生日に際して一時執行停止していました。しかし勅令に記されている書籍がモスクワで販売されていないか調査を信頼のおける人物に依頼しました。その人物が分離派の書籍を買ってきたのでここに提出します」から始まり、「一度禁止されている書籍『新しいキロペディア』が販売されていることが確認されました。ノヴィコフが再び印刷し販売したと考えます。以前この書籍には宗務院の認可印が押されていました。21日刑事院のアルスフィエフの下に行き、逮捕に向かう人物を一緒に任命しました。その後、任命された人物はノヴィコフを連行するために、モスクワから60ｋｍ離れたニキーツク郡に向かいました。翌日スハレフスカヤ塔近くにあるノヴィコフの印刷所を調査するために、警視監と警視長を私は召還しました。ノヴィコフの書籍が書店などで販売されていないか調査するように命じたところ、禁止書籍が発見されました。そのため、私は全ての書店を封印し、書籍商を監視下に置き、彼らを尋問しました。彼らは最初ノヴィコフの印刷所から書籍を引き取ったことを認めることを拒否していましたが、あとで認めました」と記述されている。さらに「ノヴィコフを連行するためにジェヴァホフ少佐指揮下12人の軽騎兵を派遣したこと、フリーメーソン関連書籍の捜査もあるので、秘密官房のシェシコフスキー長官を捜査に加えたい」との要望をプロゾロフスキー公爵は報告書に記述している。続いて、「スハレフスカヤ塔近くの印刷所で、2つの大きな図書室を見つけました。一つ目の図書室は亡くなったシュワルツの蔵書で、二つ目の蔵書はノヴィコフ、もしくはノヴィコフの会社のものです。これらの蔵書をどのように処分するのか指示を願いたいとし、今後の捜査の指示をエカテリーナⅡ世に仰ぎたい」と長文の報告書は、終わっている。 **（ノヴィコフ関連）**	**内容規制(検閲)**
1792年4月26日付け A.A.プロゾロフスキー公爵からエカテリーナⅡ世宛ての極秘書簡[7]	極秘書簡は、「4月24日に皇帝陛下にジェヴァホフ少佐作成のノヴィコフに関する報告書を送付した後にノヴィコフが昨日私の所に送還されてきました。陛下の勅令により尋問をおこないました」から始まり、3時間にわたって尋問したにもかかわらず成果がなかったこと、尋問調書をエカテリーナⅡ世宛てに送付するので読んでいただきたいこと、ノヴィコフは今までに一番狡猾な人物であり、鋭く、大胆不敵であったこと、発禁書籍の販売を命じたとついにノヴィコフを自白させたこと、ノヴィコフが健康のすぐれない振りをしている	**内容規制(検閲)**

	こと、秘密官房長官のシェシコフスキー以外はノヴィコフの尋問をおこなっても成果をあげることはできないと考えること、体調が良くないとのことでノヴィコフが医師と共に尋問にやって来ていること、両者をジェヴァホフ少佐の監視下に置いていること、ノヴィコフの体調不良のため、同日すぐには秘密官房には送還しなかったこと」など詳細にわたって、ノヴィコフの尋問の様子について、プロゾロフスキー公爵はエカテリーナⅡ世宛てに報告をおこなっている。**(ノヴィコフ関連)**	

報告書の中で、プロゾロフスキー公爵は今後のノヴィコフの捜査に関して、エカテリーナⅡ世に指示を仰いでいる。前日の4月25日にノヴィコフに対する尋問がおこなわれている。尋問調書[8]には、「ニキーツク郡から4月25日に連行されてきた陸軍中尉ノヴィコフは、警視総監宅で下記のように証言した。次の質問がノヴィコフに対して出され、ノヴィコフは以下のように答えた。質問 1) どのようにして建物や財産を手にいれたのか？印刷会社の構成メンバーは誰であるのか？回答：メンバーの名前と出資額を示し、様々な人が印刷会社に参加している。会社は借金を抱えていて、回転資金は十分にはない。質問 2) 貴方の書店では禁止書籍が販売されていたが、何の目的で禁止書籍を販売したのか？回答：印刷済みの書籍は、販売のためにモスクワの商人コリチュギンにすでに引き渡した。この点では罪を認める、質問 3) 勅令で宗務院のみが印刷を許されている宗教関連書籍が販売されているが、どんな目的で印刷したのか？どんな書籍が印刷されたのか？回答：最初は多種多様な書籍を印刷し、その後宗教関連の書籍を多く印刷するようになった。大学の印刷所の経営者だった時には、聖職者が書籍を検閲していた。だが、民営印刷所が設立されるようになった時には、聖職者が書籍を検閲することはなく、モスクワの警視監とモスクワ大学の検閲人に対して認可をもらうために提出していた。検閲人は現在の形式で書籍に署名することはなく、ただ書籍の最初に印刷認可とのみ記載しただけであった」などと記されており、最後に「ノヴィコフの息子、陸軍中尉ニコライ・イヴァノフが確認の印に署名した」と書かれている。

4月25日にノヴィコフに対する尋問をおこなった後に、プロゾロフスキー公爵はエカテリーナⅡ世宛てに前述の極秘書簡を書き記している。

1792年5月1日付け A.A.プロゾロフスキー公爵宛て勅令[9]	この勅令は、「4月24日付けの報告を4月28日に受け取り、貴方がノヴィコフの書籍を封印し、禁止書籍が販売できないように命令したことに満足している」とはじまっており、続いて、エカテリーナⅡ世からノヴィコフに関する3つの捜査の基本方針がプロゾロフスキー公爵に対して指示されている。「1) 二度までも販売と印刷を禁止した勅令があるにも、どうしてその種の書籍を販売したかを明らかにせよ、2) ノヴィコフとその共謀者は病院・薬局・学校の設立や書籍の出版活動を人類愛からおこなったと主張しているが、自分達の利益を得たいがためにおこなったものであり、信仰を隠れ蓑に精	**内容規制(検閲)**

	神的に弱い人を組織に引きずり込んでいることを暴露せよ、3) 現在の仕事に就く前にどのように国家勤務に奉職し、辞職したのか、領地はどのようにいくらで購入したことなども尋問せよ」と記述されている。**(ノヴィコフ関連)**	

この勅令は、エカテリーナⅡ世がノヴィコフの出版活動と慈善活動に関心を寄せていたことを示している。

1792年5月10日付けA.A.プロゾロフスキー公爵宛て勅令[10]	「アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ公爵！ 貴方が命令によりノヴィコフを裁判にかけなかったこと、ノヴィコフが狡猾な人間で自分の不道徳な行動を隠そうとしていること、そのために貴方が苦労しているとの内容の5月5日と6日付けの貴報告を受領した。貴報告を考慮し、ノヴィコフをシュリッセリブルグ要塞に送還することを命令する。ノヴィコフの共謀者からノヴィコフを隠すために、彼をヴラジーミル、ヤロスラーヴリ、チフヴィンを経由してシリュシンに護送し、地元の警備司令官に引き渡すことを命令する。その際にはノヴィコフの姿を誰にも見られないように、ノヴィコフが自傷行為をしないように注意せよ。ノヴィコフを送還したことは秘密にしておき、ノヴィコフの下にある文書類については信頼のおける人物が調べ、ロプヒンの印刷所についても、ノヴィコフの印刷所で行ったと同様に家宅捜索を実施することを命令する。」 **(ノヴィコフ関連)**	**内容規制(検閲)**

この勅令にしたがって、ノヴィコフを逮捕するためにノヴィコフの領地にジェヴァホフ少佐を指揮官とする軽騎兵部隊が派遣され、シュリッセリブルグ要塞へのノヴィコフの護送は厳重な警戒の下におこなわれた。プロゾロフスキー公爵からの5月18日付けのシュリッセリブルグ要塞警備司令官宛ての命令書には、ノヴィコフの名前さえ明記されていなかったほどの厳しい警戒体制が敷かれていた[11]。

1792年8月1日付けAAプロゾロフスキー公爵宛て勅令[12]	**ノヴィコフのシュリッセリブルグ要塞での監禁について** **(ノヴィコフ関連)** この勅令には、「退役陸軍中尉ニコライ・ノヴィコフの尋問調書と彼の下で発見した文書を検討した結果、我々はノヴィコフと共謀者の考えが狡猾で、有害であること、またノヴィコフの追随者に極めて盲従的な態度、無知、風紀の退廃が見られることを発見した。こういった規則に基づいて彼らの団体は組織された。最も神聖な物に対して嘘が使われた。ノヴィコフとその共謀者は、政府に対してなんら害をもたらすような考えは持っていないとして自分達の罪を認めていない。	**内容規制(検閲)**

	しかし次のような理由から、彼らが有害な国家犯罪人であることが明らかである。1) 教会や十字架や福音書などを持つ秘密結社を作ったこと、2)合法で、神によってつくられた権力をさしおいて、彼らは敢えてブラウンシュヴァイク公[13]に服従し、彼らが弾圧を受けているかのようにブラウンシュヴァイク公に不満を訴え出ていること、3) ベルリン宮廷が我々に敵意を見せている時に、ノヴィコフらはヘッセン＝カッセル家の皇太子及びプロシアの大臣ヴェルナー[14]らと彼が編み出した暗号を使って、秘密書簡をやりとりしたこと、4) 彼らは様々な方法を使って自分達の宗教セクトに有名な人物を引き入れようとした。この引き入れ工作と上記の文通についてノヴィコフが罪を認めたこと、5) 無認可の、不道徳な、ロシア正教の法に背く書籍を自分達の印刷所で印刷したこと。2 回も発禁になったにもかかわらず、新たに書籍を売り出そうとし、そのために秘密の印刷所を設立したこと、6) 会の規約には、教会、大主教、儀式など、聖なる教会以外では許されていない規則と儀式が記されている。・・・以上の罪状は死刑に値するが、人間愛に基づき、死刑を免じて、シュリッセリブルグ要塞監獄に 15 年間監禁する。その他のノヴィコフの共謀者については、本当に改悛するのであれば厳罰ではなく、首都から僻地にある彼らの領地に送り、その村が所在する県での謹慎処分とする。彼らが自分の領地に向かった時には地元の長官に彼らの行動を監視することを命じるために報告すること」と記述されている。	

この勅令では具体的にフリーメーソンとは記述されていないが、ここではフリーメーソンを厳しく断じている。

1793 年 2 月 11 日付け A.A.プロゾロフスキー公爵宛て勅令[15]	**ノヴィコフの所領地の村や店頭から集められた 3,000 冊の発禁書籍の焼却命令などを含めた 5 つの命令について（ノヴィコフ関連）** この勅令には、逮捕されたノヴィコフに関する 5 つの命令が具体的に記されており、中でも次の 2 つの項目が重要項目となっている。1) ノヴィコフの村や店頭から集められ、宗務院の事務所に保管されている 3,000 冊の禁止書籍、及び再び秘密裏に印刷された 3,000 冊を直ちに焼却に回すこと、2) ノヴィコフの家にある 2 つの外国書籍用図書室を審査し、有害な図書は破棄し、有益図書のうち宗教書はザイコノスパス・ア カデミーに、その他はモスクワ大学に引き渡すこと。	**内容規制(検閲)**

この勅令からは、すでにノヴィコフが監獄に収監されてから以後、処分対象書籍が宗教書だけではなく、外国書籍に及んでいることを窺い知ることができる。

4.2. ラジーシチェフとノヴィコフに対する弾圧

4.2.1. ラジーシチェフ

ラジーシチェフは、モスクワの裕福な地主貴族の家に1749年に生まれ、家庭教育を受け、1762年から1766年までサンクト・ペテルブルグの貴族幼年学校で学ぶ。1766年に12人の青年と共にエカテリーナⅡ世から「法学研究」のためにドイツのライプツィヒ大学に派遣されている。

エカテリーナⅡ世からラテン語、フランス語、ドイツ語、スラヴ語、哲学、歴史、自然法、ローマ史、特に法学を学ぶことが指示されている。ライプツィヒ留学中にフランスの啓蒙思想に接する。1771年にロシアに帰国、その後元老院、軍事検察局、商業参議会、ペテルブルグ税関に官吏として勤めている。ラジーシチェフが文学活動を始めたのは1773年で、ノヴィコフが設立した「書籍印刷促進協会」からフランスの評論家・歴史家・政治思想家のG.B.マブリー（1709-85）の作品『ギリシャ史考察』の翻訳をだしている。この時、ラジーシチェフはマブリーの作品を翻訳するだけにとどまらず、7つの注釈を施しており[16]、その中のひとつが「専制は、人間の本性に逆らう状態である」との過激な表現からはじまる『専制について（О самодержавстве）』[17]である。ラジーシチェフの本格的な文学作品は、1789年の『ウシャコフの生涯(Житие Федра Васильевича Ушакова)』[18]であり、科学アカデミーの印刷所で印刷され、出版されている。『ウシャコフの生涯』は2部構成で、第Ⅰ部はラジーシチェフの筆になる『ウシャコフの生涯』で、第Ⅱ部はウシャコフ自身が記した刑法・死刑論・恋愛論、及びエルヴェシウスの『精神論』に関する考察から構成されている。

この『ウシャコフの生涯』に関連して、当時の科学アカデミー院長ダーシコヴァ公爵夫人が『回想録』の中で、ラジーシチェフの庇護者であった兄のヴォロンツォフ伯爵宛てに「貴方が庇護している者には創作欲はありますが、まだ文体を自分のものにしていないし、思考は十分に練り上げられていません。彼の意見は私達の時代に危険です。・・・この創作欲によってあなたが庇護している者は、今後何かもっと非難を招きかねない作品を書くことになるかもしれません」[19]と『ウシャコフの生涯』を読んだ時のエピソードを記し、ラジーシチェフの考えの危険性を指摘している[20]。ラジーシチェフの逮捕をきっかけに、当時商業参議会議長職にあったヴォロンツォフ伯爵は、1794年に辞職している。

税関吏時代にラジーシチェフは農民や、職人、地方官吏とじかに接し、エカテリーナⅡ世の自由主義的な発言と農奴や中流階級下層部の実情との隔たりを目のあたりにし、1790年に急進的な内容の『ペテルブルグからモスクワへの旅』[21]を書き上げる。

この作品は、ペテルブルグの警視監ルィレーエフの署名付きで、ポリスから印刷認可を受けている。しかし、作品が農奴問題を含めて基本的な社会政治問題に触れ、専制体制を批判する作品であったために、ラジーシチェフは作品の出版を引き受けてくれる印刷所を見つけることができなかった。

そのため、ラジーシチェフはペテルブルグの印刷業者シノールから印刷機と活字を購入し、自宅に印刷機を設置し、最初に『トボリスクに住む友人への書簡(Письмо к другу, жительствующему в Тобольске, по долгу звания своего)』[22]を印刷、続いて1790年5月に著者名を記さずに『ペテ

ルブルグからモスクワへの旅』を 650 部印刷、25 部のみを書籍商ゾートフの書店に下ろした。奴隷制、農奴制、専制を大胆不敵に批判する作品はペテルブルグ住民の関心を呼び、ただちにその噂はエカテリーナⅡ世の知るところとなる。

エカテリーナⅡ世が作品を読み激怒したエピソードが、エカテリーナⅡ世の秘書官であったフラポヴィツキーの日記に記されている。「1790 年 7 月 7 日。ラジーシチェフの書籍に関するコメントがシェシコフスキーに送られました。彼はプガチョフよりもひどい暴徒です(он бунтовщик, хуже Пугачева)。最後にはラジーシチェフはベンジャミン・フランクリンを反乱の唱導者のように褒めて、自分を同じような人物であるかのごとく見せようとしています。」[23] このコメントは、エカテリーナⅡ世がラジーシチェフをプガチョフよりも有害な人物と評価していることを示している。

ラジーシチェフは、1790 年 6 月 30 日に逮捕され、ノヴィコフの尋問をおこなった秘密官房のシェシコフスキー長官に引き渡され、尋問されている。ラジーシチェフには死刑判決が下されたが、エカテリーナⅡ世の勅令により減刑され、シベリアに流刑となる。同じく書籍商ゾートフなど、ラジーシチェフの書籍の販売に関与した人物全員が逮捕された。発見された書籍は全て没収され、廃棄処分される。

エカテリーナⅡ世の死後、1797 年にパーヴェルⅠ世により、ラジーシチェフはモスクワへの帰還が許される。1801 年にはアレクサンドルⅠ世により、最終的に赦免される。再びペテルブルグに戻った時には、シベリア流刑で健康を損なっていた。ペテルブルグでは立法委員会勤務を命じられるも、ラジーシチェフの見識と知性をいかすことはできず、精神的にも衰えを見せ、1802 年に毒を仰いで自殺したとされる。

ロシアで発禁処分となった『ペテルブルグからモスクワへの旅』は、シチェルバートフ公爵の『ロシアにおける習俗の退廃』と抱き合わせで、1858 年に社会評論家 A.I.ゲルツェン(1812-70)によりロンドンの自由出版所からゲルツェンの序文と共に出版されている。19 世紀後半にロシア国内で何度か作品の出版が試みられている。1888 年に書籍商 A.S.スヴォーリン(1834-1912)により豪華版 100 部のみ作品の出版が許されている。そして、1905 年に第一次ロシア革命が起きたことにより作品の禁がとかれ、1905 年に N.P.パヴロフ=シリヴァンスキーと P.E.シチョゴレフ(1877-1931)の編集によりロシアで作品は出版されている。

この『ペテルブルグからモスクワへの旅』に、ラジーシチェフが検閲に関して書いた章「トルジョーク」[24]がある。この章から検閲に関するラジーシチェフの考えを考察する。

1790 年 6 月 26 日から 7 月 7 日にかけてラジーシチェフの作品を読んだエカテリーナⅡ世のコメントが残されている。

「書籍は、1790 年に無認可で印刷されています。最初は認可がないとされ、最後にはポリスの認可があるとされています。恐らく、これは嘘か、もしくは誤りでしょう。この書籍の意図は、各頁から明らかです。作者はフランスの迷いに侵されていて、権力に対する尊敬の念が小さくなるように、かつ指導者に対する国民の怒りを大きくしようとしています。彼は恐らくマルチニストであるか、その類でしょう。彼はかなりの知識を有しており、多くの書籍を読んでいます」[25]と書き記されている。エカテリーナⅡ世は、作者がフランス革命の影響を受けていることで、作品の危険性を示し、この書籍がポリスの認可をもらったことへの疑問を呈している。

出版認可を出した警視監ルィレーエフについては、1790 年 7 月 16 日付けでエカテリーナⅡ世の秘書官を務めていたベスボロトコ公爵[26]から V.S.ポポフ(1745-1822)宛ての書簡が残されている。この書簡において、ベスボロトコ公爵は、「最もばかげているのは、軽薄なニキータ・ルィレーエフ

が書物を読まずして、検閲し、題名に満足して、認可を出したことである。書物は評判となり、幸いなことにその書物は知るところとなった。書物の作者は逮捕された。作者は公衆に自分が作者であることを示したかっただけであると認めて、許しを願った。・・・印刷所の自由とポリスの愚かさからは、まるでいたずらっ子のように目を離せない」[27]と手厳しくポリス幹部の検閲人としての能力のなさを批判し、また1783年の民営印刷所設立を認めた勅令の問題点を指摘している。

この検閲に関して書かれた章「トルジョーク」について、「書籍の検閲に対する非難が含まれており、権力と政府についてかなり大胆不敵に誹謗中傷が書かれていることから、作者は皇帝を憎んでいるのでしょう」[28]とエカテリーナⅡ世はコメントし、作者に対する不快感を示している。

この「トルジョーク」の章は、主人公がトヴェーリ県（現ロシア共和国中西部）の郡都、トルジョークで、書籍を自由に印刷したいと思い、ペテルブルグに請願に出かける人物と主人公が出合うところから話は始まっている。主人公の「ロシアではすでに印刷の自由は、全ての人に与えられている」との発言に対して、男は「検閲の自由がほしい」と答える。「印刷機は自由に所有できるが、印刷は監視下におかれている。検閲が理性・機知・創造力といったあらゆる偉大なもの、優美なものの乳母となっている」[29]と述べ、印刷に制約があることへの不満を訴える。

そして、「政府は出版の有用性を認めて、全ての者に許した。思想の禁止は出版の自由のよき意図を損なうことになると認めながらも、検閲、もしくは監視をポリスに委ねた。ポリスの仕事は有害な書籍の販売を禁じることだけにあるかもしれないが、それにも検閲は無用である」とし、ラジーシチェフは続けて「一人の心なき警官が、啓蒙において最大の害をなし、長年にわたり理性の歩みを止めさせるかもしれない。彼は有用な発見や新思想を禁じ、全ての人から卓越したものを奪いとってしまう」[30]と語り、検閲がもたらす弊害を具体的に示した。

検閲が無用である理由を説明するにあたって、「言葉は必ずしも行為だとは限らないし、思想は罪にならない」と1767年にエカテリーナⅡ世が公布した『訓令』の一部をラジーシチェフは引用した上で、「印刷物には中傷が絶えない。法律で訴えることは自由であり、書籍にポリスの署名がないことが一体どんな害を与えるのか」とラジーシチェフは疑問を呈している。そして、「ポリスの署名がないことは悪いことではなく、反対に皇帝から最下等の市民にまで益をもたらす」[31]とラジーシチェフは検閲がないことによって皇帝も市民も益をうけると主張し、エカテリーナⅡ世による1783年の民営印刷所設立の勅令を歓迎しつつも、その一方で、検閲機能をポリスに付与したことを批判している。

続けて、検閲の一般規則は「自然宗教、統治、個人、公序良俗、社会の安寧に反するもの」[32]であるが、「愚かしい行為を禁ずるのは、それは奨励するのに等しい」とし、「自由にすることが一番である」と述べ、ラジーシチェフは「検閲は必要ない」と主張する。

そして、ラジーシチェフは「書籍の自由な印刷を禁ずるにあたり、小心な政府が恐れるのは瀆神ではなくて、自らの批判者を持つことである。無知の時代に神を容赦しない者は、意識と理性の時代にあっては不法な権力を容赦しないだろう。全能の神の雷を恐れない者は、絞首台をなんとも思わないであろう。だからこそ、思想の自由は政府にとって恐ろしいのだ」[33]と述べ、権力側が検閲を設ける理由を指摘している。フランス革命によるフランス国王一族の悲惨な結末を見て、エカテリーナⅡ世が思想の自由が生み出す社会に対して強い警戒心を抱いたことを、ラジーシチェフは鋭く見抜いた。

ラジーシチェフはまとめとして、「印刷物の検閲は、社会に属する。社会は著者に栄誉を与えるか、あるいは書籍の紙を包み紙に使ってしまう。・・・検閲の無益さ、ましてや学問の王国における検閲

の弊害を認めるとすれば、我々は印刷の自由の、広大にして無限な利益を知ることになるだろう。・・・思索することは全ての人に自由であり、自分の思想を述べることが全ての者にとって争う余地のないことだとするならば、頭に浮かんだり思いついたりする一切のことが人の知るところになるのは、当然である。偉大なものは偉大であり、真実は翳らないだろう。統治者は、正義の小道を外れることはできないだろう。それは自らの悪意や策略が明るみに出てしまうので、恐れるのだろう」[34]と記している。このように、ラジーシチェフは、「人間は思想と表現の自由を有している」と主張し、さらに「思想の自由と表裏一体の検閲は君主を代表とする権力側がおこなうべきではなく、作品の審判をするのは社会、公衆である」と唱える。この「最終審判者は社会である」との考えは、ノヴィコフが 1769 年の雑誌『働き蜂』で示した作品の評価は「公衆の審判にゆだねる」の考えを引き継いでいる。

その後、ラジーシチェフは、検閲の由来に関する短い物語を記している[35]。ローマ時代に遡り、中世時代のローマ法王による宗教検閲、イギリスの 15 世紀から 17 世紀までの検閲、さらにアメリカ、フランス、プロシアの検閲の実情について触れ、検閲がどのように発展してきたか、それが思想や発言の自由を制約したこと、そして制約が簡単に悪用されることを指摘している。

また、ラジーシチェフは、「フリードリヒⅡ世は印刷の自由を認めたが、批判を恐れて検閲を廃止することはしなかった」と指摘する。これは、専制君主であるエカテリーナⅡ世の検閲政策がフリードリヒⅡ世(1712-86 在位 1740-86)と同様に、専制君主として文化人から意見を発表する機会を奪い、彼らの出版活動を管理しようとしていることへの警告となっている。

「トルジョーク」の章の最後をラジーシチェフは、「ロシアにおいて検閲で何がおこったかについては、貴方は別の時代に知ることになるでしょう」[36]と締めくくっている。ラジーシチェフは敢えて、ロシアにおける検閲の事例を挙げることはせず、読者に検閲について考える材料を与えて終わっている。また、この最後の文章は、ラジーシチェフ自身がこの作品を書いたことによって立ちはだかる新たな障害を、それによって変わる自分の運命を予測して書いたと考えられる。

このように、ラジーシチェフは国家官吏でありながらも、エカテリーナⅡ世の農奴政策だけでなく、言論政策を含めて政治分野の政策にまで触れ、彼女の政策に対する批判を展開した。エカテリーナⅡ世は、この「トルジョーク」の章について「作者は皇帝たちが嫌いである。そして、皇帝たちへの愛情と尊敬の気持を減殺できる場所では、貪欲に、極めて大胆に、批判している」[37]とのコメントを残している。政策批判するラジーシチェフの持つ危険性を感じ、エカテリーナⅡ世は彼を「プガチョフよりも有害である」と評したと考えられる。

ラジーシチェフの『ペテルブルグからモスクワへの旅』は、1790 年に刊行されている。同時期の出版統制に関連する法令を考察してみると、同年 5 月にはポリスの検閲機関としての役割が再度確認されていることは偶然ではない。ラジーシチェフの処罰は 9 月に出されており、2 年後の 1792 年にはノヴィコフの逮捕、1793 年にはフランスからの新聞・雑誌の輸入禁止と、エカテリーナⅡ世の出版統制分野に対する管理はますます厳しくなっている。ラジーシチェフの事件は、エカテリーナⅡ世に出版統制分野で具体的な政策をとらせるきっかけとなったと考えられる。

1790 年に尋問をおこなった秘密官房長官シェシコフスキーの「どうしてあなたは検閲を廃止したいのですか？」という質問に対して、ラジーシチェフは「誤りを認めます。検閲はなくても良い、と私は思っていました。しかし、今は経験から、検閲があればより有益であることがわかりました。立法者(законодательница)が検閲制度を設立することをお望みになったからです。真に検閲は、私のような迷った考えを持った人間を私自身が陥った弱い理性や破滅から救ってくれるでしょう」

[38]と答えている。このラジーシチェフの検閲に関する尋問の回答は、本心ではないだろう。

これは、シェシコフスキーからの「貴方は皇帝から何か不当な扱いを受けていると感じているのですか」との質問に対して、ラジーシチェフが「一度も不当な扱いを受けたことはないし、恩寵を受けていると感じているし、今後も私と家族に対する愛情を期待しています。私が皇帝の怒りをかったことを感じています。皇帝が私の罪を許してくださると、死につつある者を家族と共に救ってくださるように、皇帝の鷹揚な心と愛情に期待しつつ、私は号泣しております」[39]と答えていることから、ラジーシチェフが尋問の後に出される判決を恐れて答えたものだったと考えられる。しかし、どうして悪い結果となることがわかっていながらも、エカテリーナⅡ世を大胆不敵にも非難したのであろうか。

「トルジョーク」の章に示されたラジーシチェフの検閲に関する考えは、当時の大方の貴族文化人の考えであったと考えられる。

このラジーシチェフもエカテリーナⅡ世に対して期待を抱いた貴族文化人の一人である。「ホチーロフ　未来の計画」[40]の章に、啓蒙君主としてのエカテリーナⅡ世に対する期待感が示されている。「ホチーロフ」の章で、未来の計画の作者は、農奴制の基礎をなしている世襲貴族を「専制の権力と刃を手にする弁護人たちは自らも頚城をまといながら、専制の最も熱烈な唱道者である」と批判し、「社会における第一の君主は、法律である。法律は全ての者にとって一つだからである」[41]と君主も法律に従うべきであると訴えている。そして、上からの改革を唱え、農奴の段階的解放の立法措置まで企てている。しかも、「学問・芸術・工芸が人間に達することが許される最高度の完成にまで高めた」[42]啓蒙君主として、エカテリーナⅡ世が計画を採用するとのラジーシチェフの期待までもが込められているように思われる。1773年にラジーシチェフが最初に翻訳したマブリーの『ギリシャ史考察』について施した注釈『専制について』の中で、「専制は人間の本性に逆らう状態である。・・・君主は市民社会の最初の市民である」[43]と強調しているように、理想の君主像はラジーシチェフにとっては最後まで変わることはなかった。

シェシコフスキーの質問に対して、ラジーシチェフは「エカテリーナⅡ世を優れた人類愛に満ちた統治をおこなっていることで、社会を驚愕させている素晴らしい専制君主」[44]と皮肉をこめて賞賛している。このように、一方でエカテリーナⅡ世を厳しく批判し、他方で賞賛するといった態度は、エカテリーナⅡ世と協力し、庇護されたけれども、出版統制分野では厳しい管理の下におかれた代表的貴族文化人のノヴィコフにも、フォンヴィージンにも見られたものである。そしてこの3者に共通して見られるのはエカテリーナⅡ世に対する啓蒙君主としての期待の気持ちが強かったことであると思われる。そして、恐れずにその期待を文章に表現し、敢えて問いただすという態度は、18世紀後半に活躍し、貴族としての「社会的役割」を強く意識していた貴族文化人の特徴とも言えよう。

4.2.2. ノヴィコフ

次に、この第Ⅲ期でラジーシチェフに続いて逮捕され、シュリッセリブルグ要塞への収監という形で、エカテリーナⅡ世からの弾圧を直接受けたノヴィコフについて考察する。第Ⅱ期で、すでにエカテリーナⅡ世は、ノヴィコフに見られた貴族文化人の活動の自立性が持つ危険性を感じ取っていた。

エカテリーナⅡ世がノヴィコフを弾圧した理由について、これまでの研究者は様々な説を唱えて

いる。ヴェルナツキーは、「ノヴィコフ事件の捜査で一番重要視されたのが、ノヴィコフとパーヴェル大公との関係をめぐる政治問題」[45]であったと主張する。同じくザーパドフも「ノヴィコフが建築家バジェノフを通じて、フリーメーソンの書籍を渡すことでパーヴェル大公に近づこうとしたこと」とし、「ノヴィコフがフリーメーソンの中心人物であり、パーヴェル大公と接触を続けていることに対して、エカテリーナⅡ世が警戒心をもった事が弾圧の理由である」[46]と説明している。

また、マコゴネンコのように、ノヴィコフが弾圧を受けたのは「エカテリーナⅡ世にとって、ロシア社会で啓蒙活動家と知られていたノヴィコフの名誉を傷つける必要」があり、「フリーメーソンは口実に使われた」と主張する研究者もいる[47]。確かに、ノヴィコフの自立した慈善・啓蒙活動は、80 年代のロシアにおいて大きな社会現象になっていたことをエカテリーナⅡ世は見過ごすことはできなくなっていたと考えられる。

いづれにしても、エカテリーナⅡ世がノヴィコフに警戒心を抱いた理由は、検閲機関を法的に整備強化したことに直接の関連性を持っている。

1862 年発行の検閲法令集には、ノヴィコフ関連の勅令は２つしか記載されていない。だが、実際には、4.1 の記述から明らかなように、モスクワ警視総監プロゾロフスキー公爵は 1792 年 4 月 24 日にエカテリーナⅡ世宛てに報告書を送っている。そして、4 月 25 日にノヴィコフの尋問調書[48]が作成され、翌日の 4 月 26 日にはプロゾロフスキー公爵はノヴィコフの尋問に関する書簡[49]をエカテリーナⅡ世に送っている。それに対してエカテリーナⅡ世も、1792 年 5 月 1 日付け勅令、そして 5 月 10 日付けの勅令、8 月 1 日付け勅令というように、ノヴィコフに関する勅令をプロゾロフスキー公爵宛てに発令し続けている。

実際にノヴィコフの尋問を担当した秘密官房長官シェシコフスキーとプロゾロフスキー公爵との間で 1792 年に何度も書簡が交わされている。5 月 4 日付けのプロゾロフスキー公爵からシェシコフスキー長官宛の書簡では、「陛下からの命令を待っているが、こんな狡猾な人物は見たことがないのでノヴィコフを一緒に尋問したい」と書かれている。また、ノヴィコフのシュリッセリブルグ要塞への送還が決まった直後、5 月 17 日付けでプロゾロフスキー公爵がシェシコフスキー長官に宛てた書簡[50]が残されている。そこには、プロゾロフスキー公爵がノヴィコフの「悪事仲間」として、I.V.ロプヒン公爵、P.V.ロプヒン公爵、トゥルゲーネフ、ヘラスコフ、在ベルリンのクトゥーゾフ公爵、N.S.トゥルベツコイ公爵（1744-1812）、ノヴィコフの兄弟、O.A.ポズデーエフや聖職者などの名前を具体的に列挙している。さらに、この書簡の追記として、「新聞を発行していた時、彼らは検閲人や翻訳者に住居を提供している。また、秘密官房のＫ某に 200 ルーブルを渡していると内容の紙の切れ端が見つかっている」とプロゾロフスキー公爵は書き記し、ノヴィコフが賄賂を渡していたことを示唆している。

1792 年 8 月 1 日付けでエカテリーナⅡ世は、ノヴィコフの処分に関する勅令を発令している。この勅令によると、ノヴィコフだけが 1792 年に厳罰を受けている。他のフリーメーソンのメンバーに対するエカテリーナⅡ世の対応は全く異なっている。プロゾロフスキー公爵が危険人物としてエカテリーナⅡ世に報告した人物の処分を見ると、モスクワのフリーメーソン員で、上流貴族のトゥルベツコイ、及びロプヒン,トゥルゲーネフについては、「彼らが心からの悔恨を示せば、厳罰に処せず、故郷の領地へ送還する」と記し、極めて穏便な処置にとどまっている。しかも、ロプヒン公爵にいたっては年老いた両親の面倒を見よとモスクワに残ることさえ認めている。このように、対処が大きく異なっている事実は、エカテリーナⅡ世の弾圧の対象がフリーメーソンというより、かつて一緒に啓蒙活動に取り組んだノヴィコフ個人であったことが読み取れる。

だが、どうしてエカテリーナⅡ世は、ノヴィコフ個人にそれほどまで警戒心を抱くようになったのだろうか。エカテリーナⅡ世はすでに1785年12月23日付けの警視総監ブリュス伯爵宛ての命令書で、モスクワのプラトン大主教にノヴィコフの書籍と目録を送り、審査させると同時にノヴィコフ個人に尋問をおこなうよう指示を出している。1786年1月11日にプラトン大主教はノヴィコフを尋問し、1月15日付けでエカテリーナⅡ世宛てにノヴィコフの尋問に関する報告書[51]を提出している。プラトン大主教は、「全世界にはノヴィコフのようなキリスト教徒がいました(во всем мире были христиане таковые, как Новиков)」と記しているように、ノヴィコフの信仰に対して特別のコメントをつけていない。

さらに続けて、報告書においてプラトン大主教は、ノヴィコフの書籍を3つのグループに分別している。「第一グループの文学作品は、まだわが国には不足しているのでこの手の書籍はより普及すべき書籍で、教育を促進する。第二グループの神秘的な書籍については、私は理解できないので判断できない。第三グループは有害で、公序良俗を乱し、聖なる信仰心に難癖をつけている書籍で、百科全書といったような恥ずべき、頭のおかしい書籍は、良質な種から生まれる悪い雑草のごとく、根絶しなければならない」と記している。しかし、プラントン大主教は、ノヴィコフの思想の危険性に関しては問題があるとは指摘していない。

ロシアでは1790年代の初めから、フリーメーソン運動はすでに衰退し始めていた。1790年にかけてエカテリーナⅡ世を含めて多くの人が、フリーメーソンやその他の秘密結社がフランスに混乱をもたらし、全ヨーロッパを恐怖に陥れていると確信するようになっていた。「エカテリーナⅡ世はプロゾロフスキー公爵にモスクワのフリーメーソンのロッジや秘密結社を閉鎖するように、またメリッシーノに対してはペテルブルグのフリーメーソンのロッジを閉鎖することを命じている。一方で、フリーメーソン員の多くがエカテリーナⅡ世の命令を待つことなく、自らロッジを閉鎖していた」[52]とスミスが指摘しているように、フリーメーソン員自身が革命とその影響に恐怖を抱いていたと思われる。

さらに続けて、スミスが「モスクワのフリーメーソンに対する措置は講じられたが、他の都市でフリーメーソンのロッジは活動を続けていた」[53]と指摘しているように、全ての都市でフリーメーソンの活動が完全に消えたわけではなかった。そのため、1794年にエカテリーナⅡ世は、特別勅令によりフリーメーソンのロッジの活動を全面的に禁止したとされる。

ノヴィコフに対して、エカテリーナⅡ世が厳しい弾圧的態度をとるようになったきっかけは、やはり1789年のフランス革命の影響に対する恐怖であり、個人出版者による出版組織ネットワークが急激な拡大をみせていたことである。さらに、ノヴィコフらの出版活動、慈善活動、及び教育活動が国家から自立した形で広く展開している現実を見て、エカテリーナⅡ世が自らの権限や管理が及ばなくなっていることに危険を感じたからだと考えられる。

ノヴィコフの出版活動については、「1771年から1780年までにロシアで1,466タイトルの書籍が出版され、そのうち出版事業を始めたばかりのノヴィコフが手がけたのが167タイトル(11%)、1781年から1790年ではロシアでは2,685タイトルの書籍が出版され、そのうちノヴィコフの印刷所が手がけたのが749タイトル(28%)」[54]とマコゴネンコが指摘しているように、明らかにその活動は目覚しい進展を遂げていた。

だが、こうした出版活動の拡大傾向は、1788年にノヴィコフがモスクワ大学付属印刷所の賃貸契約をモスクワ大学と継続できなかったことで急激に縮小している。「1788年のノヴィコフが関与していた全印刷所で155タイトルの書籍が発行されたが、1789年には45タイトル、1790年には16

タイトル、1791 年には 8 タイトルのみになっていた」[55]とザーパドフが指摘しているように、印刷所の賃貸契約の延長ができなくなって以後、ノヴィコフの出版活動は急激に影を潜めている。

ノヴィコフに対する弾圧は、彼の啓蒙・出版活動がエカテリーナⅡ世が考えていた管理の枠を超え、社会的・政治的意味を持ち始めたことと関連している。ノヴィコフは個人的に表現手段を手にいれ、出版者として別の文化人に雑誌と言う形で意見を表明する機会を与え、自分は組織者・企画者の役割に徹していたとも言える。エカテリーナⅡ世は、こういった貴族文化人の世論をつくりだす組織者としての能力に脅威を感じたのであろう。ベスボロトコ公爵からモスクワ警視総監プロゾロフスキー公爵に宛てた 1790 年 11 月 15 日付けの書簡が残されている。エカテリーナⅡ世の秘書官を務めていたベスボロトコ公爵は、書簡において「皇帝陛下はあなたの警戒心を認めています。・・・皇帝陛下は、貴方の配下の者を誰かノヴィコフの村に送り、どんな建物で、どんな施設で、どのような生活をしており、何をおこなっているかを探る必要があると考えています」[56]と記している。これは、エカテリーナⅡ世が警戒感をノヴィコフに対して抱いていたことを間接的に示している。

ロシア文学者のスローニムが、「エカテリーナは急進思想を恐れ、知識人の自由を束縛し、彼らを監視させた。だが、これらの恐怖の念は反動主義者達によって、むやみに過大視され、誇張された感がある。一部の貴族と教育ある中流階級の自由主義は、特に取り上げるほどの問題でもなかった」[57]と述べている。この意見は、ノヴィコフにもフォンヴィージンにも当てはまると考える。だが、貴族文化人が望んだ君主の協力者でもあり、助言者でもありたいとする立場と貴族文化人の自立行動は、専制君主エカテリーナⅡ世には絶対に受け入れられるものではなかった。

ノヴィコフは、1796 年エカテリーナⅡ世の死により、パーヴェルⅠ世の恩赦により釈放された。そして、1805 年に再度モスクワ大学の印刷所の賃借し、出版活動をおこなおうとしたが、大学幹部の同意は得られず、活躍の場は閉ざされたままであった。

同時代人であるグリンカが、「どれほど熱心に書籍の出版と読書の普及にノヴィコフは努力したことでしょう。・・・ノヴィコフは 18 世紀の知的歩みを進め、19 世紀へと飛び越えました」[58]と記し、ノヴィコフの出版活動が、ロシアの知的レベルを向上させたと高く評価している。だが、ノヴィコフは再び出版者として出版活動を通じて、社会で活躍することはなく、1818 年に死亡している。

この第Ⅲ期に、エカテリーナⅡ世はフランス革命の影響や共和国的傾向を持つ作品を出版統制法令に基づき、没収・廃棄している。第Ⅲ期のエカテリーナⅡ世には、すでに文芸の庇護者の姿はなく、専制君主制を維持する立場が強化されている。

貴族文化人が情報手段を獲得し、自立傾向を見せはじめたことに、そして外国の影響をロシアの貴族文化人が受けることをエカテリーナⅡ世が憂慮していたことが、具体的作品やその作者への弾圧の態度から読み取れる。

第Ⅲ期の一番重要な特徴が、外国の影響力の阻止を目的とした検閲機関の整備と強化である。この問題については、ロシア国立古文書館（РГАДА）所蔵の文書に基づいて、第 5 章にて考察する。

---

[1] プロゾロフスキー公爵は 1790 年 2 月 19 日にエロプキンに代わって、モスクワ警視総監に就任している。

[2] Сборник постановлений и распоряжений по цензуре с 1720 по 1862 г. СПб., 1862. С.25-26.

[3] Полное собрание законов Российской империи с 1649 года. СПб., 1830. Т.XXIII. С.135-136.

[4] Радищев А.Н. Избранные соч. М.-Л., 1949. С.689-693.

[5] Русская журналистика в документах: История надзора. М., 2003. С.62-63.

[6] Новиков Н.И. Избранные сочинения. М.-Л., 1951. С.591-593. 主たる一次文献資料に収録されておらず、先行研究によって存在が明らかにされている法令や筆者が研究調査の結果取り上げた文書などについては斜体で記してあ

る。
[7] Там же. С.599-600.
[8] Там же. С.593-599.
[9] Там же. С.600-601.
[10] Там же. С.601.
[11] Вернадский Г.В. Русское масонство в царствование Екатерины II. СПб., 1917. // 1999. С.316-317.
[12] Новиков. Указ. соч. С.671-672.
[13] プロシアの将軍で1792年7月フランスのマリー・アントワネットの要請を聞き入れ、フランス国民を威圧する宣言を出した人物。
[14] ここでの皇太子は、後のプロシア国王フリードリヒ・ヴィルヘルムII世（1744-97 在位 1786-97）を指す。ヨハン・ヴェルナー（1732-1800）は平民出身だが、フリーメーソンの薔薇十字団に入り、皇太子時代のヴィルヘルムII世と親しくなり、後に宗教大臣に任命される。
[15] Русская журналистика. С.63.
[16] ロシアの啓蒙家は翻訳に対する注釈という形式を使って、自らの考えを表現したとされる。最初に1768年にこの翻訳に対する注釈の形をとったのはコゼリスキーであり、ノヴィコフなどもこの形式を採用している。
[17] Радищев. Указ. соч. С.3.
[18] Там же. С.15-72. ウシャコフはラジーシチェフのライプツィヒ大学留学時代の仲間の一人であったが、若くして死亡している。この書籍は1789年に匿名で科学アカデミー印刷所から発行されている。
[19] Дашкова Е.Р. Записки. Письма сестер М. и К.Вильмот из России. М., 1987. С.175-176.
[20] ラジーシチェフはこの作品においてライプツィヒで留学生を抑圧する学監に対して立ち上がった学生の抵抗する姿を描き、専横を厳しく糾弾する態度を明確に示した。
[21] ラジーシチェフの『ペテルブルグからモスクワへの旅』の訳出にあたっては、Радищев А.Н. Избранные сочинения. М.-Л., 1949. С.73-249とラジーシチェフ『ペテルブルグからモスクワへの旅』渋谷一郎訳、東洋経済新報社、1958年を使用している。
[22] Радищев. Указ. соч. С.10-14.
[23] Там же. С. 663.
[24] トルジョークは、地名で1775年からトヴェーリ県の中心都市となっている。Радищев. Указ. соч. С.178-196.
[25] Радищев. Указ. соч. С.663.
[26] ベスボロトコ公爵は1775年からエカテリーナII世の秘書官となり、1780年から外務参議会に勤め、1781年から外務参議会から独立した郵便局局長となる。1786年に皇帝評議会のメンバーとなり、エカテリーナII世に評議会議事録を含め各種報告を行った人物である。
[27] Радищев. Указ. соч. С.690.
[28] Там же. С.670.
[29] Там же. С.178.
[30] Там же. С.179.
[31] Там же. С.179-180.
[32] Там же. С.180.
[33] Там же. С.181.
[34] Там же. С.183.
[35] Там же. С.183-196.
[36] Там же. С.196.
[37] Там же. С.670.
[38] Там же. С.677.
[39] Там же. С.679-680.
[40] Там же. С.159-171.
[41] Там же. С.162.
[42] Там же. С.159.
[43] Там же. С.3.
[44] Там же. С.673.
[45] Вернадский. Указ. соч. С.317.
[46] Западов В.А. К истории правительственных преследований Н.И. Новикова. XVIII век. Сб.11. Л., 1976. С.47.
[47] Макогоненко Г. Николай Новиков и русское просвещение XVIII века. М.-Л., 1951. С.521-522.
[48] Там же. С.593-599.
[49] Новиков. Указ. соч. С.599-600.
[50] Там же. С.603-604.
[51] Там же. С.580-581.
[52] Douglas Smith. Freemasonry and the Public in Eighteenth century Russia・Imperial Russia. Indiana

University Press. 1999. P.174.
[53] Ibid.
[54] Макогоненко. Указ. соч. С.507.
[55] Западов В.А. Краткий очерк истории русской цензуры 60-90-х годов XVIII века. С.120.
[56] Письмо графа А.А.Безбородки к московскому главнокомандующему ннязю А.А.Прозоровскому. Русский архив. 1892. Вып.1. С.95.
[57] マーク・スローニム『ロシア文学史』池田健太郎訳、新潮社、1976年、52頁。
[58] Глинка С.Н. Записки. М., 1895. // 2004. С.20-24.